

ペスタロッチー教育賞 受賞者紹介

学校法人ノートルダム清心学園 理事長

わた なべ かず こ
渡 辺 和 子 氏

1927年北海道旭川に生まれる。陸軍将校であった父の異動に従い、幼いうちは東京、台北とたびたび居を替えた。高齢で授かった子であったため父からは特別に可愛がられた。9歳のとき、陸軍教育総監であった父がそのリベラルな発言のために二・二六事件で殺害される。その後は、父の名を汚さぬようにと母に厳しく育てられた。

カトリックの^{わたなべ}高等女学校に通い、終戦間近の45年4月に自分を変えたいと決意して洗礼を受ける。戦後は経済的に苦しく、働きながら聖心女子大学そして上智大学大学院修士課程で学んだ後、56年にカトリック・ナミュール・ノートルダム修道女会に入会する。59年米国に派遣され、62年ボストンカレッジ大学院でPh.Dの学位を修得して帰国、岡山市のノートルダム清心女子大学に教授として赴任を命ぜられる。翌63年には36歳で学長に就任、90年からは学校法人ノートルダム清心学園理事長を務めている。

学長就任以来、幼児教育、初等中等教育から高等教育に至るまで、学園の教育基盤の確立発展、充実を図った。また、日本カトリック学校連合会理事長も兼任し、教育界、特にカトリック系私学教育の振興にも尽力した。その間、68年にはウィーン大学で開催された世界会議「平和推進における大学の役割」に招かれて講演を行い、アウシュビッツを経験したフランクルと同席して交流を深めている。また、ノーベル平和賞受賞者であるマザー・テレサが84年に来日された際には通訳を務め彼女の考えに直接触れる機会を得ている。

渡辺氏には多くの著作がある。最近のものでは『目に見えないけれど大切なもの』(2012)、『「ひと」として大切なこと』(2013)、『面倒だからしよう』(2013)、『幸せはあなたの心が決める』(2015)等がある。中でも2012年に出版された『置かれた場所で咲きなさい』は180万部のベストセラーとして読み継がれている。これらの著作に紡がれた言葉は、苦難の中の光として読者に届く。それはカトリックのシスターと

して語り出された言葉であり、また、今を生きようとする学生に向けられた教育者の言葉でもある。氏は、生き悩む学生に対し、困難に直面した人間がイエスの教えによっていかに導かれうるかを、自らの人生の苦難を例に語ってきた。その言葉は苦難の中にある読者に寄り添い、生を全うできるよう励ます言葉ともなっているのである。

渡辺氏の言葉は高みからの成功者の言葉ではない。氏自身の人生が決して順風満帆なものではなかったのである。確かに、恵まれた環境に育ち、終戦直後でありながら高等教育を受け、外国人に交じってオフィスワークをこなす最先端の女性であった。米国留学を果たし、36歳で学長に抜擢もされた。しかしながら、幼くして父親の殺害されるところを目の当たりにし、厳しくしつけられながらも、希望した学校や修道女会からは受け入れてもらえなかった。外国での学位修得には大変な苦労が伴い、また、岡山という見知らぬ土地への赴任に加え、修道女としては新参者で教育経験も乏しい中、人々を束ねつつ将来を見据えて成果を上げていかなくてはならない学長職は荷が重かった。50歳にして鬱病を発症し、クリスチャンでありながら自死すら考えてしまう苦境を体験している。60代半ばになって膠原病を患い、副作用によって背骨の一部を失いもした。自分自身の苦難を飾らずに語る氏の言葉は、学生らの生き方に影響を与え、救いの言葉となっている。そして、いまや多くの人々の生きる指針として広がり始めている。人は氏の言葉から、与えられた苦難を受け容れ、他者を救い、自らを活かす術を知るのである。

ペスタロッチーもまた、信仰の人であり、苦悩の人であった。信ずるところに従い、貧困に苦しむ人々のために私財をなげうって理想の農園を開き、経営に行き詰まる。文筆活動を通じて理想を語り、多くの支援者を得るとともに論敵から批判される。シュタンツやイヴェルドンという不案内な地に学校を開き、子どもたちの教育に献身して多大な成果を上げる一方、学校自体は政治的対立や教員間の不信などにより閉鎖を余儀なくされる。彼は困難に遭いながらも理想を求めて諦めなかった。ペスタロッチーのその姿こそが後の教育者を勇気づけてきたのである。

信ずるところに従い、学校という学びの場を開いて女子を導いてきた渡辺氏の姿はペスタロッチーに重なる。氏の長年の努力と功績に対し、第24回ペスタロッチー教育賞を贈呈し、高く顕彰したい。